

No 17

1973.

1. 28

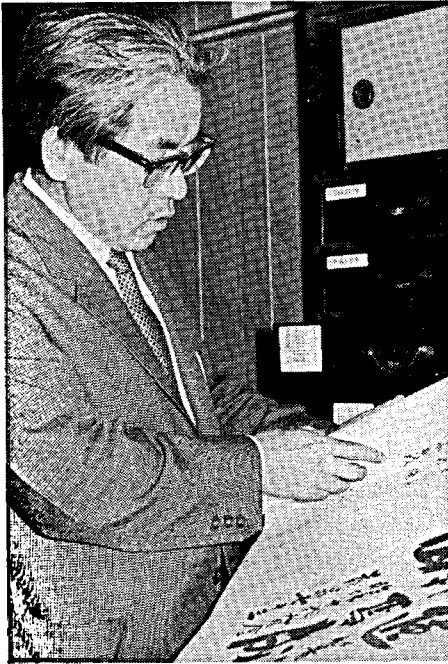
岐阜の博物館

編集兼発行
岐阜市岩戸花月町
2の1
濃飛甲冑研究所内
岐阜県博物館協会
責任者 吉田幸平
振替 名古屋 28716

館・園 紹介 No 15

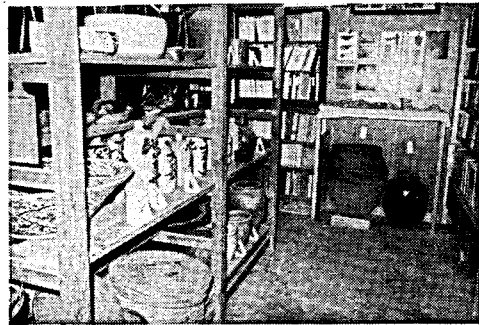
片野 記・念 館

〒503-02 安八郡輪之内町四郷
TEL <058469> 3570



写真上, 古文書・肖像画の模写に、天才的な技術を発揮した亡父・温氏の作品を、たんすから取り出して説明される片野知二氏。

写真右上, 資料が保存されているたんすそのものも、祖先の生活を物語る展示資料であるとともに、掛け軸・陶磁器(右下へ)その他、郷土の歴史資料が、整理・展示されている。

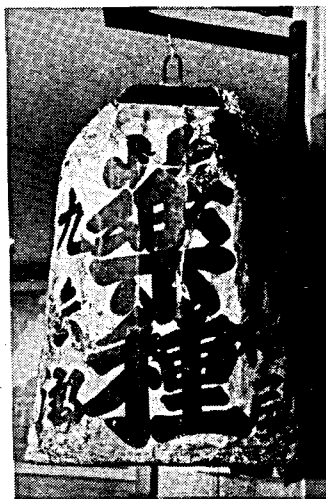


水との戦いの土地、— 福東輪中に残された「庶民資料屋敷」、輪中に生きた庶民の家、郷土史家・片野温(あつし)氏の文化遺産を保存した家で、歴史資料の現地保管のモデルともいべき資料室である。「郷土史を学ばせるとは何か?」を、体験から割り出された片野知二氏(徹明小教諭)は、郷土に根をおろした博物館活動こそ本物だと、私費を投じて、屋敷の一角にある納屋倉(60㎡)を改築し、父温氏の遺業を顕彰するために、家に伝わる諸資料を展示して、昭和46年5月に一般公開したものである。主な資料は、中世古文書の影写模本、金石拓本、濃飛梵鐘記録、古絵図、俳句美濃派資料、近世庶民資料、民具古陶器等々、故温氏の、古文書、肖像画の模写技術は、まさに天才的な一級の腕前で、県内の古文書を写したり、また郷土史家として実物を集めたりで、とくに、信長や道三等、戦国武将の肖像12幅は、「国盗り物語」の放映にあたり、脚光をあびている。このほか、道三の背状の模写本、信長の朱印状、加納城の絵図、関ヶ原合戦絵巻(模写本)江戸時代の岐阜町絵図と、興味深く、それなりに、郷土の文化遺産として価値高いものばかりである。



内藤記念くすり資料館

医学博士 青木允夫



8世紀の養老令に「凡市毎、肆立、標題、行名。」とある。市は店舗を建て、店ごとに看板をたて、販売する品名を標記せよ、というものである。これがわが国の看板の初めとされているが、看板を出すのは自主的ではなく、法律によって強制されたものであった。

今でいう看板の興隆は江戸時代になってからである。中国の招牌が堺に伝わり、堺商人がまず使用、のち江戸町民によって急速に発展した。

招牌（かんばん）というように、看板は人に訴求するものでなければならない。各業者は、知名の能筆家、学者の揮毫を得て、これに金箔を施したりして、世人の注目を引くようにした。特にくすり看板は、他の業者にみられないような、りっぱな看板を作った。

江戸後期には、嵯峨御所など親王家に金銭を贈り、御用薬種ということで、十六菊紋の使用を許され、これを看板や引札に使用した。

江戸時代の天和2年（1682年）と天保13年（1842年）に、幕府は看板に金銀箔を用いることを禁止している。天和2年は、將軍綱吉の時代で、大老堀田正俊の儉約令によるもので「木地の看板に墨にて書付け、……かなものは鉄銅の外は一切仕るまじく……」とある。

天保13年は、老中水野忠邦の奢侈禁止令で「天和のお触れを守らぬものがある。早々と違反の看板は取りはずせ」といっている。

文政（1820年代）の頃より、江戸でも蘭方と称するものが現われ、看板に横文字を使用するものが多くなった。

天保11年（1840）と嘉永6年（1853）

に、売薬の看板に横文字を用いることを禁じたお触れが出た。「近年売薬の看板などに、蘭学にて認め候も相見え仕候。以来蘭学は無用に致すべく候事申渡置候処……市内諸看板等横文字認め差出候も之れあり候由、不埒之至に付、早々取払申すべく候」

この横文字のある看板で有名なのが「ウルユス」の看板である。VLOYM VAN MITRRと書いてあるが、つづりが違っており、さらに文法的にも誤りで、痰の薬とすべきを、「薬の痰」としている。

写真の袋看板は、薬草の入っている袋を形どったもので、薬屋と薬屋からわかれた砂糖屋だけが用いた。はりぼてで、雨の日や風の強い日は家の中に取り込んだ。明治になってからは、ブリキ製でペンキを塗ったものもみられた。

くすり看板には、勅許、御免、神仏夢想、家伝秘方、一子相伝などと記したものが多かったが、明治8年の売薬取締規則によって禁止された。したがって、これらの文字の有無で看板の古さがわかる。

事業展開と運営拡充のための賛助会員制を！

定例役員会に於て、協会発展のため上記賛助会員制が検討されました。地味で目立たぬ博物館活動にご理解があり、当協会への資金面でのご支援をいただけますような、個人及び会社・各種法人等、県下各地の協会会員の皆様のご努力により、多数加入していただきたいもの、今から探しておいてください。

昭和48年度博物館学ゼミナー予定

昨年の9月8日に第1回を開催してから、順調に進んで来ましたゼミナーは、広く一般の方々にも公開するとともに、県下各地をまわって催し、地域博物館探訪をも兼ねる方向で、下記予定にて行ないます。詳細はその都度案内致します。多数の方々の意欲的な参加を望みます。

※第5回 2月4日(日)

- 場所 日本モンキーセンター附属博物館
内容・モンキーセンター附属博物館及び猿二郎コレクションの解説・見学
・モンキー博物館の教育カリキュラムと年間行事計画 広瀬鎮先生
・霊長類研究における研究員と博物館との関連 水原洋城先生

※第6回 3月4日(日)

- 場所 岐阜市内
内容・社会教育評論 松田 充先生
・円空について 藤田松太郎先生
・企業附属博物館に就て 青木允夫先生

※第7回 4月1日(日)

- 場所 高山市 飛驒の里
内容・飛驒の里各施設見学
・飛驒に於る化石と自然保護
ひた福地記念館 山腰 悟先生
・千光寺における円空及び密教の繋り
丹生川村千光寺住職
・飛驒に於る江馬一族と三木自綱をめぐる
飛驒春秋主宰桑谷正道先生
§ 民宿計画中

※第8回 5月6日(日)

- 場所 奥美濃編(郡上八幡)
内容 未定

※第9回 6月3日(日)

- 場所 国盗り物語編(岐阜市)
内容 "国盗り物語" 史跡探訪 革手城、常在寺、瑞竜寺、崇福寺、道三塚、大桑城南泉寺、城田寺、鷺山城等

※第10回 7月1日(日)

- 場所 東濃編 内容未定

過去の足跡

※第1回・博物館に於る展示と方法

- " 吉田幸平先生
" 広瀬 鎮先生
" 小野木三郎先生

※第2回・台湾の博物館 金子 功先生

- ・ソビエットの宗教博物館を巡る社会的背景論
吉田幸平先生
・パネル「弱小博物館における展示展開の方法」
吉田・金子・広瀬ほか、

※第3回・全国博物館大会参加報告 広瀬先生

- ・「博物館へどうぞ」(自作スライド) 小野木先生
・仏像の基本的な見方 石川良宣先生

※第4回・岩村町郷土館紹介 樹神 弘先生

- ・博物館に於る資料分類法 宮崎 惇先生
・百貨店に於る博物館的展示 吉安辰夫先生
・美濃の古陶器とその展開 古川庄作先生

§ゼミナー及び見学・研修会等につきまして、お気づきの点・ご要望など、どんどん事務局までお知らせ下さい。ゼミナーの記録集を出版する計画はありますが、資金難で悩んでいます。



神坂文化資料館できる

中央自動車道の建設で失なわれていく遺跡からの出土品等を展示して、中津川市神坂に誕生。公民館の一角40㎡を使い、土器石器等千点余を展示したもの。今後のより一層の充実が望まれます。

瑞浪に化石博物館の構想

化石のメッカ瑞浪市では、やはり中央自動車道建設にともなう化石の発掘で、多量の化石資料が得られたため、国や県の助成金を申請して、博物館を建設する計画が進行中。クジラの化石などは有名であり、自然系の博物館が立ち遅れているだけに、早期実現と、多額の国・県の補助金が望まれる。福祉行政をうたった超大型予算も、社会保障・年金等だけに目を奪われることなく、精神的福祉の柱となるべき博物館への公共補助の増大なくして、どうして福祉文化国家といえるだろうか。

事務局だより

※ 新役員紹介 ※

12月3日の定時役員会に於て、下記のごとく役員の一部変更が決定されました。

監事 石川良宣(文化財保護協会常任理事)
松田 充(東海地区社教評議会議長)
藤田松太郎(円空顕彰会理事長)

以上3名理事より移動

理事兼編集責任者 小野木三郎(学芸員)

編集部員 柴田佳章(梅林中教諭)

※ 岐阜県博物館所在地図作成の計画について

国盗り物語ブームで、岐阜への観光客増加が期待される本年は、上記のようなイラスト案内地図及び所在一覧表を作成する計画です。県内の各館園へ配布しご利用願うことはもとより、県内各旅館等に配布・掲示していただき、一般大衆の方々への案内板とする目的です。

協会会費納入済の館園から優先的に載せさせていただきますので、年会費公立2,000円、

「濃飛の文化財」 第3号発行される

岐阜県文化財保護協会では、特集「国盗り物語」のサブタイトル付きで、昨年12月38頁の機関誌第3号を発行しました。会員配布物。入会希望者は、〒500 岐阜市司町 総合庁舎内、岐阜県文化財保護協会宛申込むこと。年会費は千円。

隠れたベスト・セラー 岐阜城物語

新しい年の始まりとともに、NHKから放映された「国盗り物語」は、戦国ブームをもたらそうとされていますが、本協会副会長で、岐阜城館長の郷 浩先生が書かれました「岐阜城物語」が注目され、識者の間で広く読まれています。最近、「斎藤道三の人間像を探る」を加筆され、道三を再評価した付録(一部20円)を印刷されました。郷先生が「岐阜城物語」を書きはじめられたのは、昭和33年、TV視聴だけでなく、この本もぜひお読み下さい。岐阜城物語480円、送料115円、申込み先、〒500 岐阜市大仏町九番地 郷 浩 宛

私立1,500円、未納の館園は至急送金下さい。

※ 表彰規程による表彰者の推せんについて

機関誌16、P12に載せました規程により、表彰該当者がございましたら、昭和48年3月31日迄に推せん下さるようお願い致します。

編集後記 ◎年の暮れから正月にかけて、11日間ほど、神話の国宮崎県でのんびりしてきました。西都原古墳群にたずんで、本誌発行の遅れも忘れていました。お許しください。

◎くすり資料館の青木允夫先生からは、くすり看板を紹介していただきました。次号からも、県内各地から、収集資料にまつわるいろいろなお話を載せてまいります。乞ご期待。

◎牛歩でもいい。着々と一歩一歩、本県の博物館界の前進の為に、本誌が少しでもお役に立てば、と、気持ちを新たにしています。

(小野木学芸員)